

国際機関実務体験プログラム

1. はじめに

横浜みなとみらい地区に位置する国際機関でボランティアに取り組む「国際機関実務体験プログラム」には、毎年春休みと夏休みに各3名、計6名の学生が参加している。このプログラムは、「学生に国際交流・協力の実務体験の機会を提供すること」、「大学で習得した学問と現場での実践の融合及びその応用」、「将来、国際性豊かな資質と世界的な問題を視野に入れて活動できる人材の育成」¹を目的として掲げている。2005年春に（財）横浜市国際交流協会(以下、YOKE)の呼びかけに応じ、本センターとの協働ではじめられ、プログラム全体のコーディネートを行う YOKE、受け入れ機関である国際機関、学生を派遣する立場である大学の3者が協働で運営しているプログラムである。プログラム開始から3年経った現在では、横浜市内に所在するフェリス女学院大学、横浜国立大学、横浜市立大学も加わり、4大学合同プログラムとなっている。派遣先も現在では8機関となり多くの機関が関わっている。本稿では、参加学生の関心を受け入れ機関での活動に有機的につなげることを通して、プログラムの長所をさらに生かすべく、今年度センターが学生指導において行った改善点を中心に報告したい。

2. 参加学生の関心を受け入れ機関での活動につなげる

応募用紙の記述や面接での発言から、在住外国人支援や持続可能な開発、食糧問題と貧困の改善など、各自が強い関心を持つテーマがわかった。学生の関心と受け入れ先での活動内容をまとめたものが【表1】である。サークルやNGO活動、ゼミなどで実際にテーマについて取り組んだ経験のある学生たちを派遣することによって²、彼らの関心や経験が各機関での活動に有機的につながる結果となった。学生たちは充実感とやりがいを感じ、責任をもって日々の活動に取り組み、各自大きな成果をあげ、プログラム参加を通して意識の変化を経験した。たとえば、国連食糧農業機関（以下、FAO）で活動した学生は、FAOが発行する冊子に子ども向けのものがないことに着目して、子ども向けパンフレットの原案をプログラム報告会で発表した。また、YOKEで活動した学生は、YOKEの事業担当者に同行して多文化が共生する街や学校を訪ねたことにより、「身近で起きている出来事や故郷である沖縄が直面している課題の改善に寄与したいと考えるようになった」と報告している。

やがて社会人となる大学生に各機関が取り組む問題を深く理解させ、将来それらの解決に直接、間接的に携わる人材を育成したい、また参加した学生を媒介に、ともに問題解決にあたる仲間の裾野を広げたいというねらいが本プログラムにはあるが、学生たちの活動の成果はそのねらいと合致しているといえる。

¹ （財）横浜市国際交流協会（YOKE）作成「国際機関実務体験プログラム関係機関の役割」に記載。

² テーマに関心があることに加え、テーマを掘り下げた経験のある学生を選考し、派遣している。

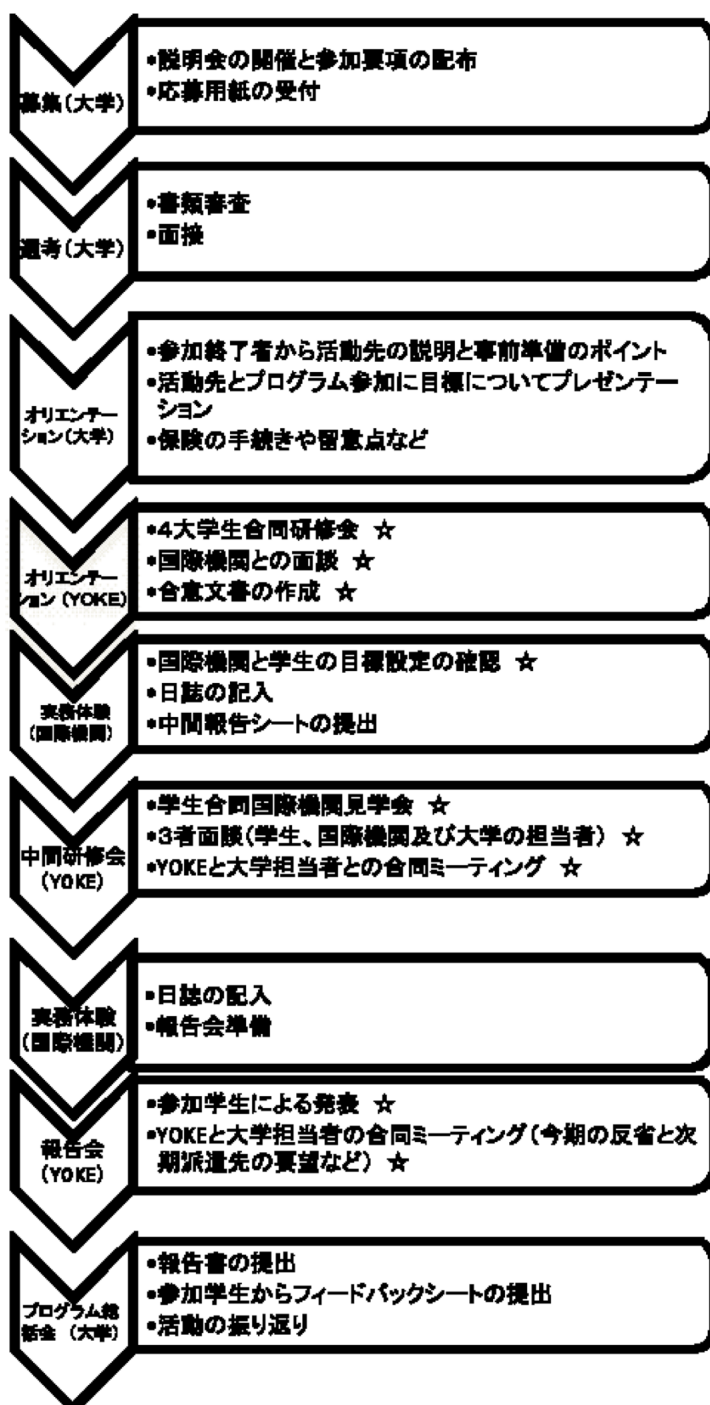
【表1】学生の関心と活動内容(2007年実施)

学生の関心	活動先	派遣先での活動	時期
持続可能な開発	国連大学高等研究所 (UNU-IAS)	1. 「生物多様性条約とアクセスと利益配分」を英文から日本語に翻訳 2. 海洋生態系や生物多様性などをテーマした会議への出席 3. 里山サブグローバル評価に関するセミナー及び研究補助	2月3月
国際理解教育の実践	(財)横浜市国際交流協会 (YOKE)	1. 「地球市民講座-国際協力コース」のアシスタント(広報活動、講座運営、報告) 2. 「中東・イスラム理解セミナー」の広報活動 3. 「小学校英語教育サポーター研修会」のアシスタント(準備、研修会運営、報告)	2月3月
人権 (関連領域として、 貧困、教育、開発、健康)	(NPO法人)国連WFP協会	1. 「Food Force(食糧支援を体験するシュミレーションゲーム)」を小中学校に普及させる企画考察 2. 「ハンガーマップ(飢餓状況を表した世界地図)」の改訂版校正作業 3. WFPが提供する携帯電話キャリア向け情報の翻訳・編集 4. 小中学生を対象とした作文コンクールのテーマのアイデア出し	2月3月
貧困と食糧問題	国連食糧農業機関(FAO)	1. Tele-Foodコンサートの広報(案内状や新聞記事のドラフト作成など) 2. イベントの準備、運営、報告 ・「食べたいせつフェスティバル」FAOブースでFAOについて説明及び報告書の作成 ・「子どもアドベンチャー」の準備及び報告書作成 3. 活動の集大成としてのレポート作成 テーマ「シリアにおける農業開発」	8月9月
社会開発	(独)国際協力機構 横浜国際センター (JICA横浜)	1. 研修員受入れ業務アシスタント ・漁業コミュニティ開発計画コース ・将来予測に基づく保健医療対策など 2. 高校生実体験プログラムのアシスタント	8月9月
在住外国人支援 留学生の就業支援	(財)横浜市国際交流協会 (YOKE)	1. 横浜市国際学生会館で留学生支援策をヒアリング「地球村1日体験留学」(小学生と留学生との交流イベント)の準備と運営 2. 「地球市民講座-多文化共生コース」のアシスタント(ヒアリング、打ち合わせ、広報、講座運営、学生シンポジウムパネリスト、報告) 3. 「地球市民講座-アフリカ理解講座」広報活動、モニタリング	8月9月

3. 学生指導の一層の充実

本センターではプログラム終了後に学生から提出されたフィードバックシートの分析などを通して学生指導の改善をはかってきたが、今年度はさらに以下の点に留意した。①活動先機関のミッションや活動内容について学生に事前に理解させること。②学生が抱えている問題意識やプログラム参加にあたっての目標を、自分で活動先機関担当者や YOKE 担当者に伝えるよう学生を訓練すること。③活動先の活動内容や取り組みたいテーマについて、英語でも説明できるように事前準備させること。④プログラム期間中の学生指導をより充実させること。⑤4大学からの参加学生全員の報告が掲載された報告書の作成が必要であること。①～③については、学内オリエンテーションで学生に指導し、④については「中間報告シート」の提出とプログラム前半までの「週報」の提出を求めることで学生の状況を正

【図1】プログラムの流れ



※1 【図1】は学生の活動を中心として記載している。

※2 ☆印は YOKE がおこなったものである。

要望の調整、実務体験中の学生のフォローなどについて、YOKE にきめ細かく対応していただいているおかげであり、深く感謝している。今後とも、プログラムがさらに充実したものとなるよう、YOKE や国際機関と積極的に連携し、また学生指導においても一層の努力を続けていきたい。

(糸井)

確につかむようにした。⑤については、2007年夏におこなわれた YOKE と大学担当者の合同ミーティングで提案し、実施に向けて準備が進んでいる。【図1】は、それらの点を取り入れた 2007 年度のプログラムの流れである。「大学のオリエンテーションで、活動先についてプレゼンテーションをしたことで、研修中の目標をより絞り込むができた」という声があったように、このような指導は学生から好評であった。また、受け入れ機関からも「事前に機関のことを理解しており、目的意識もはっきりしているので、スムーズに活動に入れた」という評価を頂いた。また、「中間報告シート」の活用により、学生の状況を正確につかむことができ、問題解決が円滑に進んだ例もあった。

3. 最後に

本プログラムは、全体をコーディネートする YOKE、受け入れ機関となる国際機関、学生を送り出す大学の3者が連携し、その特徴や強みを生かしあうことで、参加学生と受け入れ機関の期待に沿うプログラムが実現している。参加学生からの評価と満足度が高い人気のあるプログラムになっているのは、受け入れ先となる国際機関との交渉、大学間から出される